

アムスルだより

No.14 1995年 7月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875

アムスルとは、阿嘉島臨海研究所のニックネームです



オカヤドカリの話

海岸からずいぶん離れたところにある貝殻、おやっと思ってよく見ると、なにやらもぞもぞと動いています。ひっくり返してみると、堅いはさみと脚でぴったりと蓋をした生物・・・。

というわけで、今回は沖縄ではアマンと呼ばれ親しまれている、オカヤドカリについてお話ししましょう。オカヤドカリは、その名のとおり陸上で生活しているヤドカリです。阿嘉島では、小型のナキオカヤドカリ、大型のオカヤドカリ、ムラサキオカヤドカリをよく見かけます。沖縄には他にも、オオナキオカヤドカリ、コムラサキオカヤドカリ、サキシマオカヤドカリが棲んでおり、6種類全てが国の天然記念物に指定されています。このうちサキシマオカヤドカリは、黒島と石垣島、北硫黄島での採集例があるだけという珍しい種ですが、ほかは特に珍しいものでもなく、数も多いようです。

阿嘉島にもたくさんのオカヤドカリが棲んでいます。日中はその姿をあまり見かけることがありません。日差しの強い昼の間、オカヤドカリたちは、

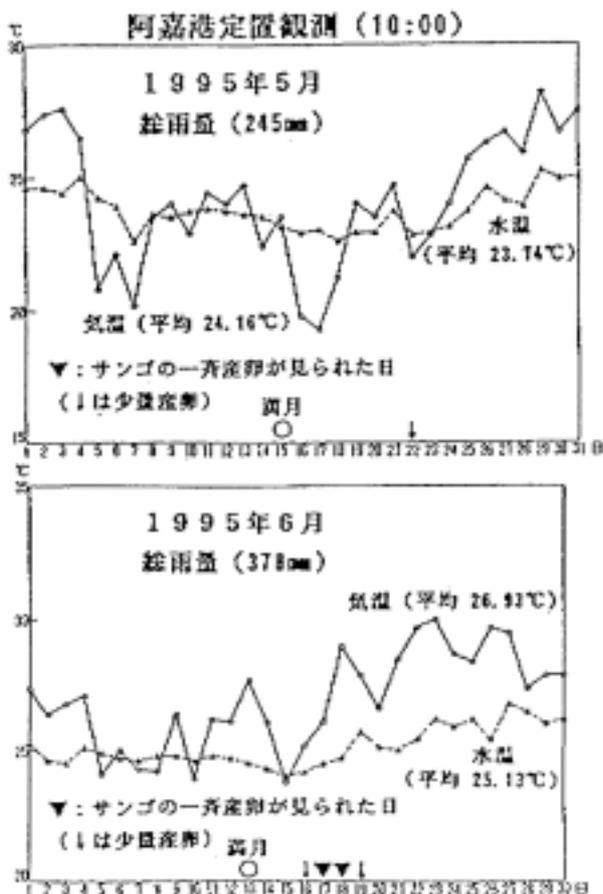
木や草の陰、石の下などにひそんでいるのです。そして、夜、涼しくなると餌を探しにゴソゴソとはい出してきます。餌は主にアダンの実ですが、雑食性なので他にもいろいろなものを食べます。朝早く、まだ誰も踏み荒らしていない砂浜で、無数の八の字型に連なった模様を皆さんも見たことがあるのではないのでしょうか。これが、オカヤドカリの足跡で、よく見ると、中央に貝殻を引きずった跡の一本線も観察できます。

ヤドカリが背中にしょっている貝殻のことを宿貝といいます。これは、死んだ巻貝の殻を利用したもので、阿嘉島では、海に棲むアマオブネガイの仲間やチョウセンサザエの殻が多いようですが、ときには陸上に棲むカタツムリの殻を利用しているオカヤドカリも見られます。もちろん、宿貝は、これ自体は成長しません。そこで、ヤドカリが大きくなれば宿貝も大きいものへと取り替えてゆく必要があります。しかし、そう簡単に貝殻を見つけられるわけではありません。ときには他のヤドカリとケンカをして貝を奪い取ることもあります。

オカヤドカリは、もともとは他のヤドカリと同じように海の中で生活して

おり、それが陸上で生活するようになった生物だと考えられています。その証拠に、今でもオカヤドカリの雌は繁殖期である夏の大潮の夜、潮の満ちる頃、波打ち際にやってきて、殻の中でふ化した子供を海に放ちます。また海に棲むヤドカリと同じようにエラで呼吸しているので、あまり乾燥しすぎると死んでしまいます。そのくせ、長い間水中にいても溺れてしまうというやっかいな生物なのです。

オカヤドカリは、阿嘉島ではとても身近かに見られる生物です。しかし、海に放たれた子供達がどのくらいの期間海で生活して陸に上がってくるのか、どうして海を離れて不便な陸上で生活するようになったのか、まだまだ多くの謎につつまれた不思議な生物です。



阿嘉島の海より

-ミドリイシの産卵-

前号で予想したとおり、今年の5月15日の満月の時点では、卵が成熟しているサンゴは少ししかなく、産卵は見られませんでした。5月23日の朝、阿嘉港でサンゴの卵の集団が少し浮いていたので、わずかに産卵したものと思われる。6月に入り、大部分のサンゴは卵の成熟が十分に進んでいたため、一斉産卵は6月13日の満月よりも早くなることを予想していました。しかし実際には、満月の4・5日後の6月17・18日に一斉産卵が見られました。ちょうど満月の頃、水温が24にまで下がったため、産卵日が遅れたものと思われる。サンゴの産卵を目当てに来られた方々には、ご迷惑をおかけしましたが、サンゴの産卵にはまだ謎が多く、予想が難しいことをご理解下さい。今年も多くの方々からサンゴの産卵情報を提供していただき、ありがとうございました。

-マリンスクール-

今年のマリンスクールは7月18日に慶留間小中学校で行います。サンゴやウミガメのお話の後、研究所で飼育しているウミガメ(タイマイ)を皆で放流します。慶留間島の子供たちにも、慶良間の海の素晴らしさを、少しでも理解してもらえれば幸いです。

また、毎年ウミガメの産卵調査に来ている人たちに、7月下旬に阿嘉島でウミガメの講演をして頂きます。日時と場所は、後日お知らせしますので、興味のある方はぜひ聴きに来て下さい。